

1 県財政の現状

(1) 歳入歳出の状況

■ 本県では、これまで財政健全化に向けた取組を進めてきたものの、高齢化の進展等による社会保障関係費の増加や公債費の高止まりにより、依然として厳しい財政状況が続いていた中で、平成30年度に発生した「平成30年7月豪雨災害」への対応などにより、一段と厳しい状況に直面しています。

なお、新型コロナウイルス感染症が発生・拡大しており、その感染拡大防止等の緊急対応を継続的に行う必要があることから、県財政への影響を注視する必要があります。

歳入

※ 以下各表の数値は、特段の注記がない場合、一般会計ベースであり、令和元年度以前は決算額、令和2年度は9月補正後予算額を示す。

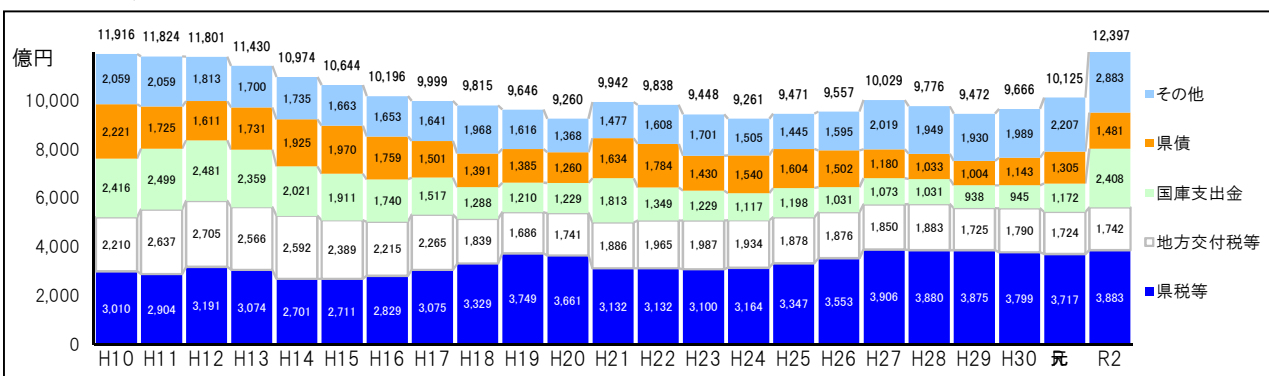
- 歳入規模は、平成10年度をピークとして、財政健全化の計画的な取組に伴う歳出抑制などに連動し減少傾向にあったが、平成21年度以降、国の経済対策に対応した国庫支出金の増や地方消費税の税率引上げに伴う県税等の増により増加傾向に転じていた。
- こうした中、平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により増加し、令和2年度についても、引き続き、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことに加え、新型コロナウイルス感染症への対応により、1兆2,300億円を超える規模となっている。

【県税等】 三位一体改革（平成16～18年度）に伴う税源移譲等の影響もあり増加傾向にあったものの、平成21年度に景気後退の影響などにより大幅に減少。平成24年度以降は企業業績の回復や地方消費税の税率引上げ等に伴い再び増加傾向にあったが、平成30年度以降は、平成29年度の教職員給与負担権限の移譲に伴う広島市への税源移譲により減少。なお、令和2年度は地方消費税の税率引上げ等に伴い増加。

【地方交付税等】 三位一体改革等の影響に伴い平成19年度には1,686億円まで減少したものの、平成20年度以降、地域活性化や雇用創出などの経費が別枠で加算されたことにより増加。平成24年度以降は県税収入の増加や教職員給与負担権限の広島市への移譲に伴い再び減少傾向。

【国庫支出金】 三位一体改革に伴い減少したものの、平成21年度に国の経済対策交付金等により大幅に増加。その後、経済対策の収束とともに再び減少したものの、平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むとともに、国の「新型コロナウイルス感染症対策」等を活用するため2,400億円を超える規模となっている。

【県債】 平成10年度以降、投資的経費の計画的縮減に伴う建設地方債の発行抑制等により減少傾向にあったものの、平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むため1,400億円を超える規模となっている。



※ 県税等は、県税と地方法人特別譲与税（平成21年度から令和元年度までは地方法人特別譲与税）の合算としている。

歳 出

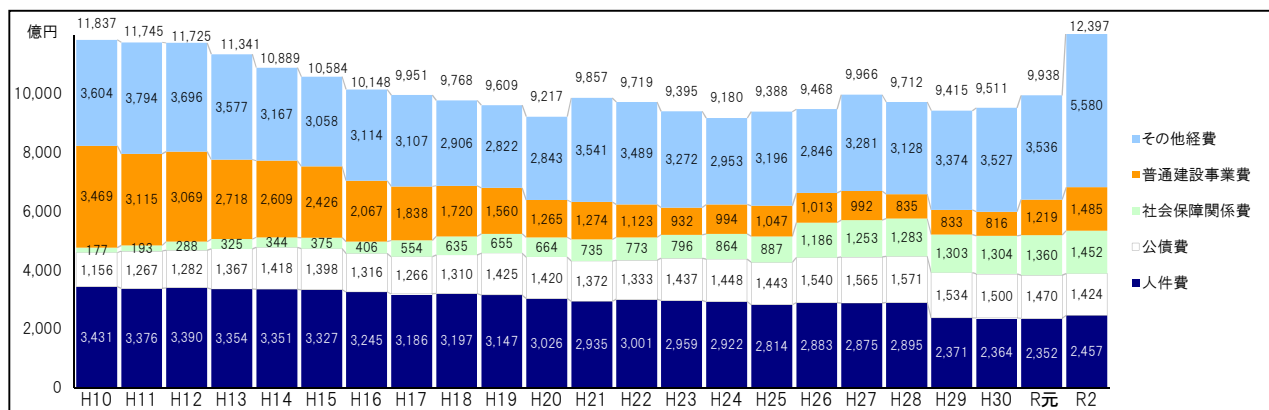
- 歳出規模は、平成10年度をピークとして、財政健全化の計画的な取組などにより減少傾向にあったが、平成21年度以降、国の経済対策に対応した緊急経済・雇用対策や地方消費税の税率引上げに伴う税交付金の増などにより再び増加。
- こうした中、平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により増加し、令和2年度についても、引き続き、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことに加え、新型コロナウイルス感染症への対応により、1兆2,300億円を超える規模となっている。

【人件費】 計画的な職員数の見直しなどにより減少傾向にあり、平成29年度からは教職員給与負担権限の広島市への移譲に伴い大幅に減少したものの、令和2年度は、会計年度任用職員制度の導入などにより増加。

【公債費等】 過去の投資に伴い大量発行した建設地方債分が平成26年度をピークに減少に転じたものの、近年の臨時財政対策債の増発などにより高止まりが続くとともに、社会保障関係費は、高齢化の進展などにより増加傾向。

【普通建設事業費】 国の経済対策に伴う対応等により一時は3,000億円を上回る規模で推移していたものの、平成11年度以降は財政健全化の計画的な取組等に伴い減少傾向にあった中、令和元年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により大幅に増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むため1,400億円を超える規模となっている。

【その他経費】 平成21年度以降、国の経済対策等により増加傾向にあった中、平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」に伴う被災者支援等の実施により増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことに加え、地方消費税の税率引上げなどによる税交付金の増、新型コロナウイルス感染症の発生・拡大に伴う緊急対応策の実施等により、5,500億円を超える規模となっている。



※ 社会保障関係費は、平成25年度までは、介護保険、国民健康保険、後期高齢者医療制度に係る主要6事業の給付費を、平成26年度からは、社会保障・税一体改革の趣旨を踏まえ、主要6事業以外の「医療」・「介護」分野の事業及び「少子化対策」分野の事業を含めた社会保障給付費等を計上している。(令和元年度からは幼児教育・保育の無償化に係る経費、令和2年度からは高等教育の無償化に係る経費を新たに計上)

(2) 財政状況

■ 本県財政は、バブル崩壊以降の景気低迷による県税収入の落込み、また、数次にわたる経済対策などにより普通建設事業費が高水準で推移したことや、財源不足の補てんのために増発した県債の償還費の急増、社会保障関係費などの義務的経費の増加などにより、厳しい財政状況が続いていましたが、平成30年度に発生した「平成30年7月豪雨災害」への対応などにより、一段と厳しい状況に直面しています。

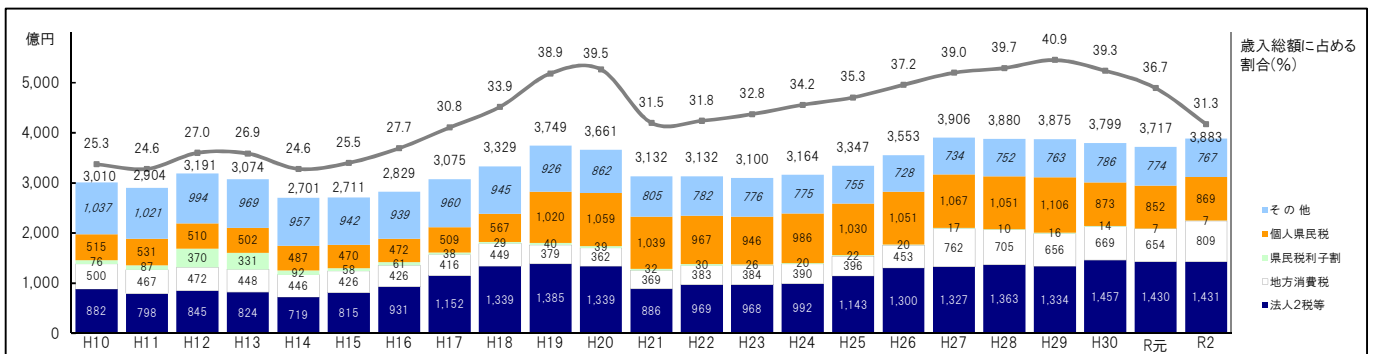
なお、新型コロナウイルス感染症が発生・拡大しており、その感染拡大防止等の緊急対応を継続的に行う必要があることから、県財政への影響を注視する必要があります。

① 県税収入等の減少

- 平成21年度以降、景気後退の影響などにより大幅に減少したものの、近年は企業業績の改善や平成26年度の地方消費税の税率引上げ等により増加傾向。
- 平成30年度は、平成29年度の教職員給与負担権限の広島市への移譲に伴う税源移譲の影響により減少。
- 令和2年度は、地方消費税引上げ等により増加。
- なお、令和2年度は、「平成30年7月豪雨災害」への対応や新型コロナウイルス感染症緊急対応策の実施に伴う経費が大幅に増加するため、歳出総額に占める割合は大きく低下。

令和2年度税収：3,883億円（特別法人事業譲与税を含む）

歳入構成比：31.3%～前年度（36.7%）に比べて5.4ポイント減少。



※ 法人2税等には、特別法人事業譲与税を含む。（平成21年度から令和元年度までは地方法人特別譲与税）

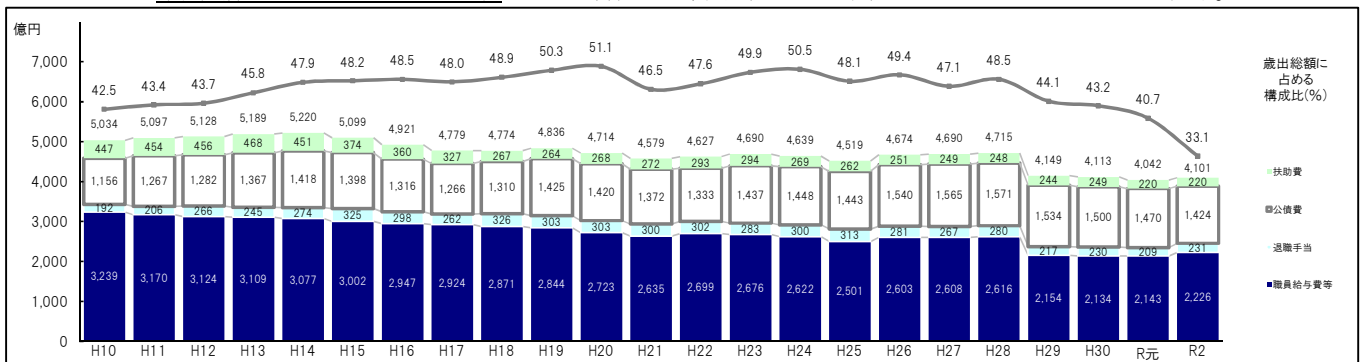
② 義務的経費等の増加

- 人件費のうち、職員給与等は計画的な職員数の見直しなどにより減少傾向にあるものの、過去、大幅に公共事業費を増額したことにより他県に比べて公債費の負担が大きく高止まりの状態が続いている。
- 平成29年度以降は、教職員給与負担権限の広島市への移譲に伴い職員給与等は大幅に減少したものの、令和2年度は、会計年度任用職員制度の導入などにより増加。
- なお、令和2年度は、「平成30年7月豪雨災害」への対応や新型コロナウイルス感染症緊急対応策の実施に伴う経費が大幅に増加するため、歳出総額に占める割合は大きく低下。

令和2年度義務的経費：4,101億円

（うち、公債費：1,424億円～平成10年度（1,156億円）に比べ1.2倍の増加）

歳出構成比：33.1%～平成10年度（42.5%）に比べて9.4ポイントの低下。

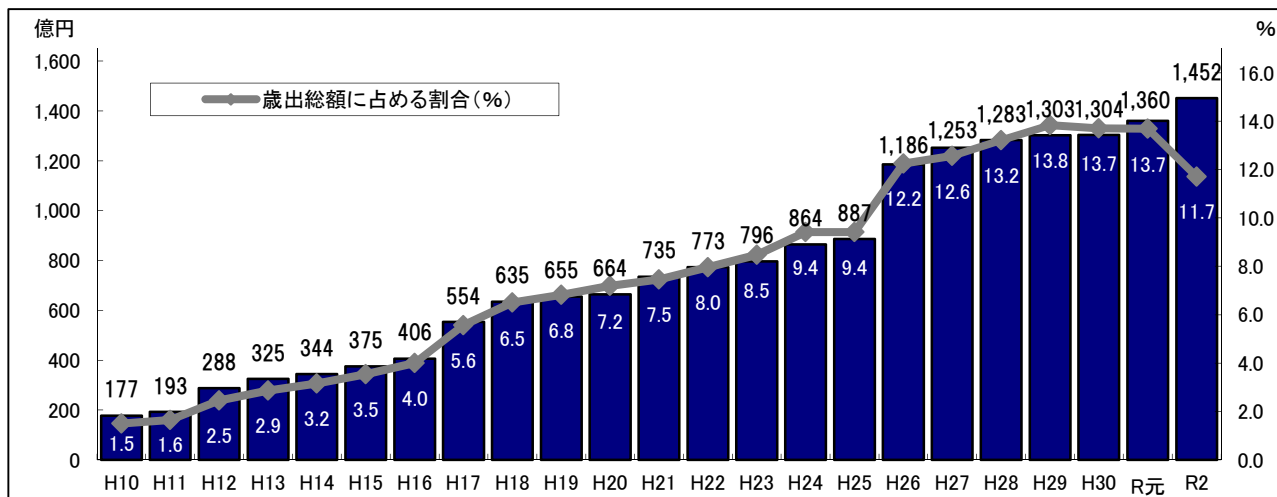


③ 社会保障関係費の増加

- 高齢化の進展などにより、医療、介護、少子化対策などの社会保障関係費は、引き続き増加傾向。
- なお、令和2年度は、「平成30年7月豪雨災害」への対応や新型コロナウイルス感染症緊急対応策の実施に伴う経費が大幅に増加するため、歳出総額に占める割合は低下。

令和2年度社会保障関係費：1,452億円 ～ 平成10年度（177億円）に比べ8.2倍の増加

歳出構成比：11.7% ～ 平成10年度（1.5%）に比べて10.2ポイントの上昇



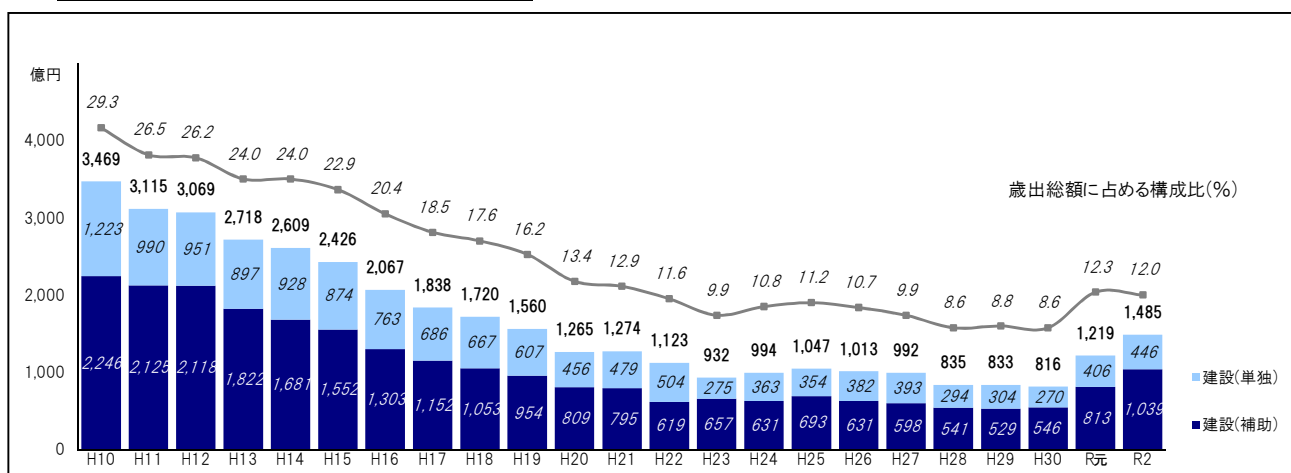
※ 社会保障関係費は、平成25年度までは、介護保険、国民健康保険、後期高齢者医療制度に係る主要6事業の給付費を、平成26年度からは、社会保障・税一体改革の趣旨を踏まえ、主要6事業以外の「医療」・「介護」分野の事業及び「少子化対策」分野の事業を含めた社会保障給付費等を計上している。（令和元年度からは幼児教育・保育の無償化に係る経費、令和2年度からは高等教育の無償化に係る経費を新たに計上）

④ 普通建設事業費の増加

- 過去数次にわたる国の経済対策に伴う対応等により、一時は3,000億円を上回る規模で推移していたが、平成11年度以降は、財政健全化の計画的な取組などにより減少。
- 令和元年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により大幅に増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことにより1,400億円を超える規模となっている。

令和2年度普通建設事業費：1,485億円 ～ 平成10年度（3,469億円）に比べて4割程度の水準

歳出構成比：12.0%

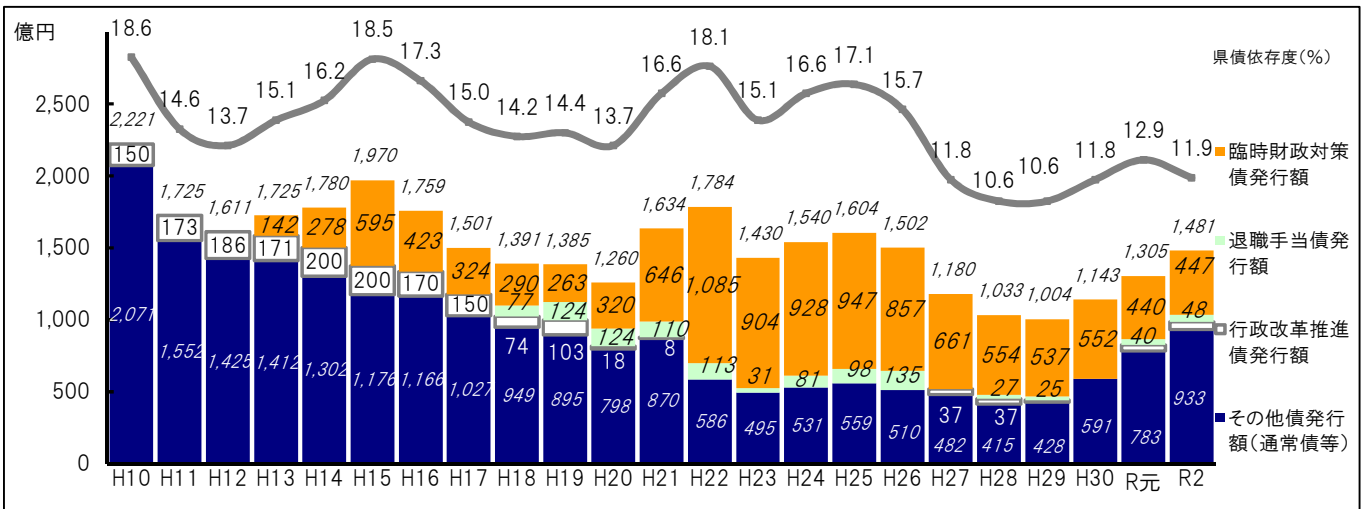


⑤ 県債残高の増加

県債発行額

- 平成4年度以降、国の経済対策への対応等に伴う公共事業費の大幅な増額などにより県債発行額が急増したが、近年は、臨時財政対策債（後年度に全額交付税措置）は高止まりしているものの、財政健全化の計画的な取組などにより通常債の発行を抑制していることから、県債発行額は減少傾向。
- 平成30年度以降は、「平成30年7月豪雨災害」への対応により増加し、令和2年度についても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことにより1,400億円を超える規模となっている。

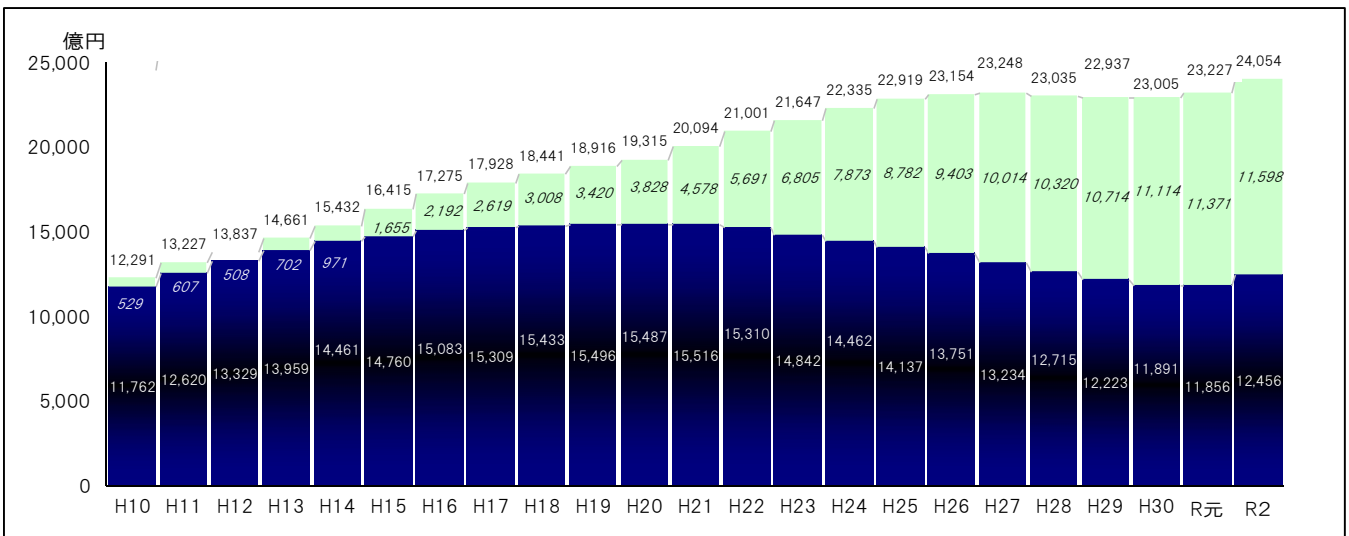
令和2年度県債発行額：1,481億円 ～ 平成10年度（2,221億円）に比べ2/3程度の水準
 （うち通常債発行額：933億円 ～ ピークの平成10年度（2,071億円）に比べ1/2程度に減少）
 県債依存度：11.9%



実質的な県債残高

- 臨時財政対策債の増加等により県債残高全体では高止まりしているものの、財政健全化の計画的な取組などにより通常債を抑制しているため、実質的な県債残高は、平成22年度以降、減少傾向。
- 「平成30年7月豪雨災害」からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に必要な公共事業費を大幅に増額することなどにより、多額の県債を発行するため、令和2年度の実質的な県債残高は増加。

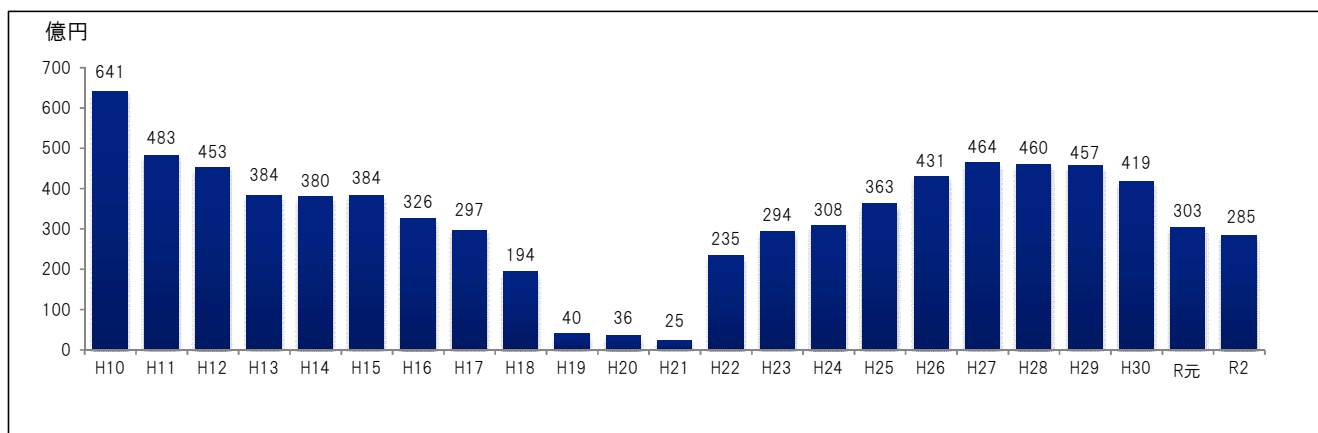
令和2年度末の県債残高見込：2兆4,054億円 ～ 平成10年度（1兆2,291億円）に比べて2.0倍
 実質的な県債残高見込：1兆2,456億円 ～ 令和元年度末残高見込と比べて600億円増加



※ 実質的な県債残高とは、県債のうち臨時財政対策債などの全額地方交付税措置のある県債と、将来の満期一括償還に備えて一定のルールで減価基金に積み立てた額を償還したものとみなして、その額を除いたものであり、今後の収収等により償還しなければならぬ県債残高である。

⑥ 財源調整的基金残高の減少

- 財源調整的基金の残高は、平成3年度末（1,932億円）をピークに、バブル崩壊以降の景気低迷による県税収入の落ち込みや、国の三位一体改革に伴う地方交付税の大幅な削減などの影響により、平成21年度末にはほぼ底をついたが、財政健全化の計画的な取組などにより、近年は一定の残高を確保し、中期財政運営方針（平成28～令和2年度）に基づき、基金の計画的な活用も図りながら、必要な政策的経費を確保している。
- しかしながら、平成30年度及び令和元年度においては、「平成30年7月豪雨災害」への対応に伴い多額の基金を活用。
- 令和2年度当初予算においても、引き続き、豪雨災害からの一日も早い復旧・復興を目指し、「創造的復興による新たな広島県づくり」に最優先で取り組むことなどから、令和2年度末残高は285億円まで減少する見込み。

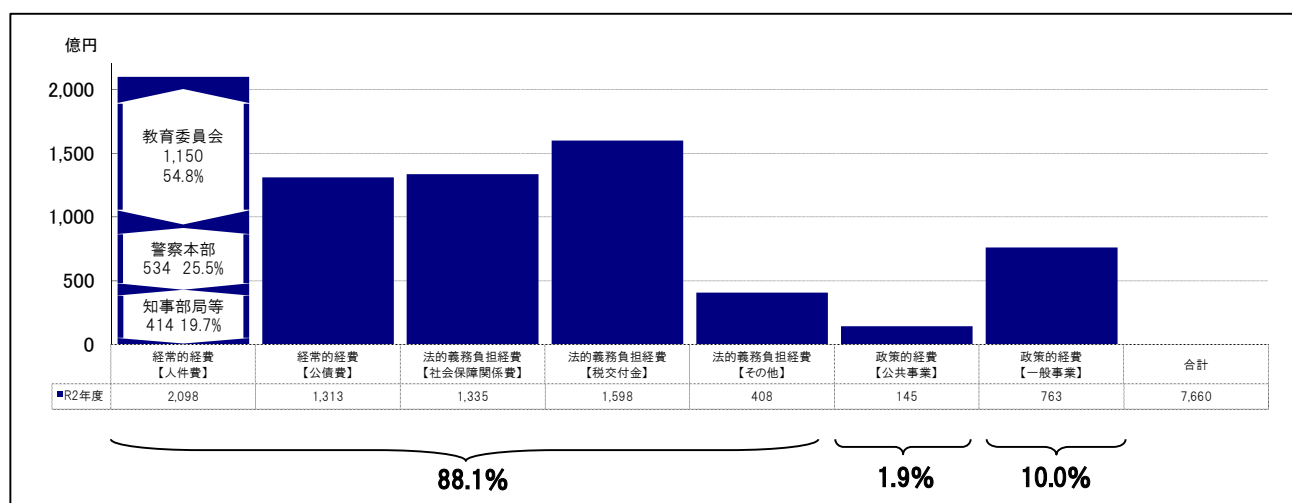


※1 財源調整的基金とは、年度間の財源調整を目的とした積立金（財政運営のために自由に使える貯金）のことで、本県では財政調整基金と減債基金の一部をいう。

※2 数値は、年度末（5月末）残高であり、令和元年度までは決算額、「R2」は令和2年度9月補正予算後の見込みとしている。

（参考）歳出構造の状況（令和2年度当初予算 ※一般財源ベース）

- 令和2年度当初予算における歳出の経費区分別内訳（一般財源ベース）は、経常的経費（人件費、公債費）及び法的義務負担経費で全体の88.1%を占める。
- 公共事業を除いた政策的経費は全体の10.0%。



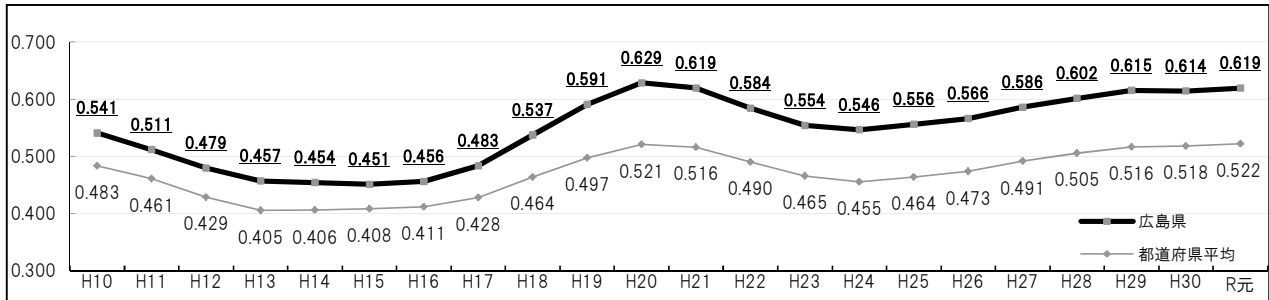
(3) 財政指標

■ 近年、財政指標は、これまでの財政健全化の取組などにより、数値的には改善傾向が見える財政指標もありますが、公債費の高止まりや、高齢化の進展などによる社会保障関係費の増加が見込まれることや、「平成30年7月豪雨災害」への対応などにより、依然として厳しい財政状況が続いています。

① 財政力指数

〔財政力指数〕 財政力を示す指標
 基本的な財政需要に対する地方税などの収入の割合（基準財政収入額／基準財政需要額）
 （当該年度を含む過去3年間の平均）

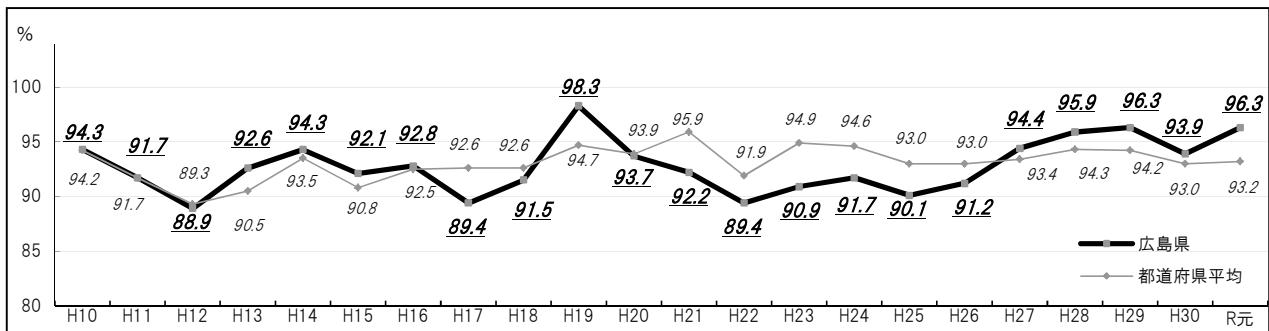
- 令和元年度の財政力指数は0.619ポイントとなっており、ほぼ横ばい。
- 一貫して全国平均を上回って推移。



② 経常収支比率

〔経常収支比率〕 財政構造の弾力性を判断する代表的な指標
 人件費、公債費など毎年度経常的に支出される経費に充当された一般財源等の額が地方税、普通交付税など毎年度経常的に収入される一般財源等に占める割合

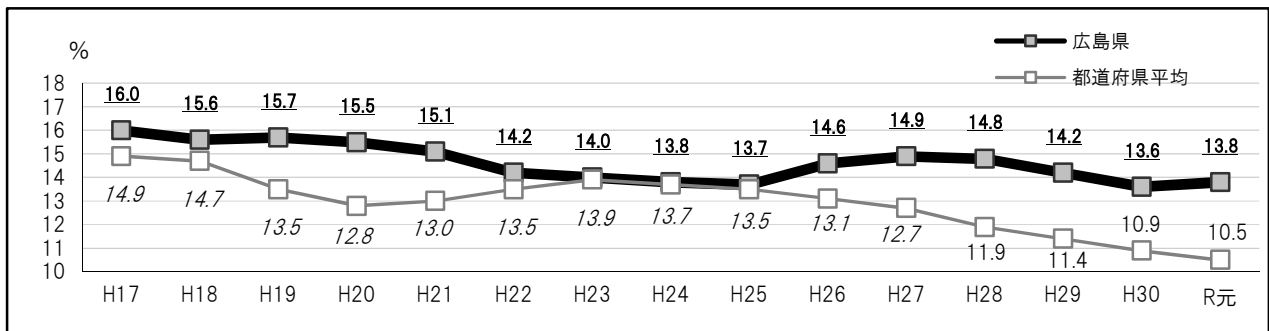
- 令和元年度の経常収支比率は、96.3%となっており、前年度と比べ2.4ポイント上昇。
- 令和元年度は、全国平均を3.1ポイント上回る水準。



③ 実質公債費比率

〔実質公債費比率〕 財政構造の弾力性を判断する指標
 一般会計等が負担する元利償還金（準ずるものを含む）の標準財政規模に対する比率
 （当該年度を含む過去3年間の平均）

- 令和元年度の実質公債費比率は、13.8%となっており、前年度と比べ0.2ポイント上昇。
- 引き続き、全国平均を上回る水準で推移。

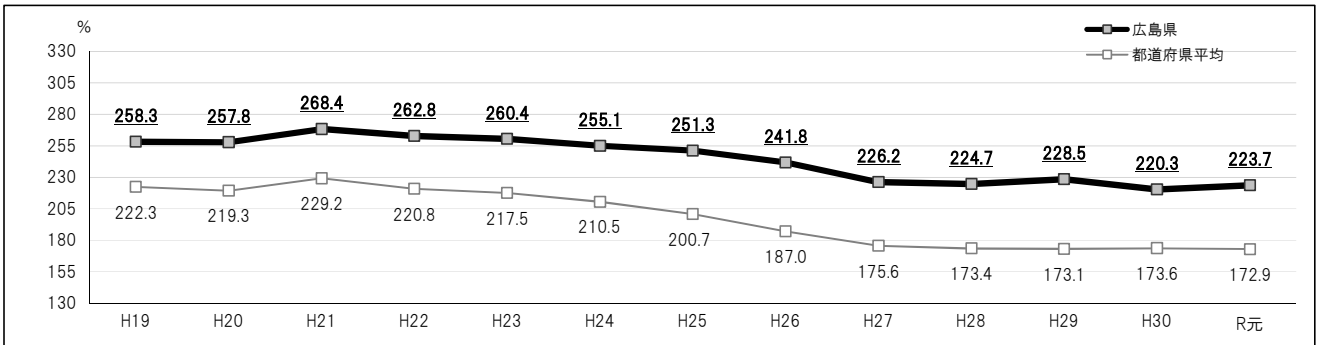


※ 比率が18%以上となった場合、地方債許可団体となる。また、25%以上となった場合、財政健全化法に基づく早期健全化団体となる。

④ 将来負担比率

〔将来負担比率〕 財政構造の持続可能性を判断する指標
一般会計等が将来負担すべき実質的な負債の標準額が規模に対する比率

- 令和元年度の将来負担比率は、223.7%となっており、前年度と比べ3.4ポイント上昇。
- 引き続き、全国平均を大きく上回る水準で推移。



⑤ プライマリーバランス

〔プライマリーバランス〕 県債の元金償還と発行額（臨時財政対策債などを除く）とのバランス

- 平成22年度から令和元年度までは10年連続の黒字。
- 「平成30年7月豪雨災害」への対応により、令和元年度は34億円の黒字にとどまり、令和2年度は赤字を見込んでいる。



※ 令和元年度までは決算額、令和2年度は9月補正予算編成後の見込みとしている。

(4)健全化判断比率

- 平成20年度から「地方公共団体の財政の健全化に関する法律」に基づき、健全化判断比率等の公表が義務付けられました。
- 令和元年度決算に基づく本県の健全化判断比率の算定結果は、いずれの指標も財政健全化計画の策定が必要となる早期健全化基準を下回っています。
- しかしながら、今後も公債費の高止まりや、高齢化の進展などによる社会保障関係費の増加が見込まれることや、「平成30年7月豪雨災害」への対応などにより、依然として、本県財政は厳しい状況が続いており、今後も、計画的かつ着実に財政健全化の取組を進めていく必要があります。

本県の状況

広島県の健全化判断比率の状況

区分	実質赤字比率	連結実質赤字比率	実質公債費比率	将来負担比率
令和元年度	—	—	13.8%	223.7%
平成30年度（参考）	—	—	13.6%	220.3%

基準	早期健全化基準	3.75%	8.75%	25.0%	400.0%
	財政再生基準	5.00%	15.0%	35.0%	—

※ 実質赤字額及び連結実質赤字額は、都道府県では該当なし

全国の状況

- 本県の実質公債費比率及び将来負担比率は、他の都道府県と比較すると、それぞれ低い順から40番目、38番目に位置しており、いずれも都道府県平均を上回っている状況にあります。

実質公債費比率

【単位：％】

順位	都道府県	比率	順位	都道府県	比率
1	東京都	1.5	25	岡山県	11.5
2	島根県	6.3	26	徳島県	11.7
3	岐阜県	6.6	26	福岡県	11.7
4	和歌山県	7.5	26	鹿児島県	11.7
5	沖縄県	7.9	29	鳥取県	11.8
6	福島県	8.3	30	山形県	11.9
7	熊本県	8.5	31	宮城県	12.9
8	奈良県	8.7	31	石川県	12.9
9	大分県	8.8	33	青森県	13.0
10	千葉県	8.9	33	福井県	13.0
11	佐賀県	9.0	35	秋田県	13.1
12	茨城県	9.6	35	富山県	13.1
12	香川県	9.6	37	三重県	13.4
14	栃木県	9.8	38	山梨県	13.6
15	長野県	10.0	39	愛知県	13.7
15	山口県	10.0	40	静岡県	13.8
17	神奈川県	10.1	40	広島県	13.8
18	愛媛県	10.2	42	兵庫県	14.0
19	群馬県	10.6	43	京都府	14.8
19	高知県	10.6	44	岩手県	15.3
21	滋賀県	10.9	44	大阪府	15.3
22	宮崎県	11.0	46	新潟県	16.6
23	埼玉県	11.1	47	北海道	20.7
24	長崎県	11.2		全国平均	10.5

将来負担比率

【単位：％】

順位	都道府県	比率	順位	都道府県	比率
1	東京都	23.6	25	長崎県	198.3
2	沖縄県	42.6	26	岡山県	198.5
3	栃木県	103.4	27	滋賀県	202.1
4	青森県	109.9	28	香川県	202.9
5	宮崎県	111.2	29	和歌山県	203.6
6	神奈川県	114.6	30	茨城県	204.0
7	佐賀県	115.0	31	熊本県	205.6
8	福島県	123.7	32	山口県	206.7
9	鳥取県	136.9	33	山梨県	208.6
10	千葉県	140.1	34	岐阜県	211.9
11	愛媛県	149.0	35	石川県	215.9
12	奈良県	156.0	36	鹿児島県	217.7
13	宮城県	161.9	37	岩手県	221.7
14	大阪府	164.3	38	広島県	223.7
15	群馬県	165.4	39	静岡県	242.5
16	長野県	170.6	40	山形県	246.0
17	福井県	172.4	41	富山県	253.5
18	大分県	174.8	42	秋田県	260.2
19	徳島県	180.6	43	福岡県	263.3
20	三重県	184.7	44	京都府	292.9
21	埼玉県	185.5	45	新潟県	326.7
22	島根県	186.4	46	北海道	326.9
23	愛知県	187.3	47	兵庫県	338.8
24	高知県	189.9		全国平均	172.9